

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

思春期の日系国際児の文化的アイデンティティについての研究

著者	鈴木 一代
雑誌名	埼玉学園大学紀要. 人間学部篇
巻	12
ページ	79-92
発行年	2012-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000370/

思春期の日系国際児の文化的アイデンティティについての研究

A Study on the Cultural Identities of Adolescent Japanese - Indonesians in Indonesia

鈴木 一代

SUZUKI, Kazuyo

The purpose of this study is to clarify the cultural identities of intercultural children with Japanese ancestry, Japanese mothers' views on their children's cultural identities, as well as the relationship between the mothers' views and the actual cultural identities of their children. The participants were five adolescent Japanese-Indonesians (12-14 years old) who have a Japanese mother and an Indonesian father, and their mothers. They all live in Indonesia. Semi-constructed interviews were conducted. In addition, participant observations were carried out at their school. The analysis was mainly qualitative in nature. The results suggest the following: Adolescent Japanese-Indonesians are on their way to forming "identities as intercultural children" in which both Japanese and Indonesian culture has been mixed, because they are acquiring both cultures as well as both languages, to some extent, and are relatively well accepted in the societies in which they dwell. Those are regarded as the conditions for forming "identities as intercultural children". However, the relationships between the mothers' views on the cultural identities of their children and their children's actual cultural identities were only partly clarified.

<問題>

「国際児」は、「国籍と民族が異なる男女の間に生まれた子ども」(鈴木、2004)であり¹⁾、成長とともに、母親の文化(国)と父親の文化(国)の両方と向き合い、複数文化を意識しながら、(文化的)アイデンティティを一生模索していくと考えられる。そのため、国際児にとって文化的アイデンティティは極めて重要である。国際児にとって、最も自然

なのは、どちらの文化(国)のアイデンティティをもつかではなく、「国際児としてのアイデンティティ」、すなわち、二つの文化(国)が混合(融合)したアイデンティティを形成することであり、国際児がそのようなアイデンティティを形成するためには、二つの言語力と二つの文化の知識を習得していること²⁾、そして、国際児を肯定的に受け入れる環境の存在が不可欠であることが指摘されている(マーフィ重松、2002; 鈴木、2004)。

キーワード：文化的アイデンティティ、言語・文化、日系国際児、思春期 インドネシア
Key words : cultural identity, language and culture, Japanese-Indonesians, adolescence, Indonesia

「国際児としてのアイデンティティ」形成の前提のひとつである、国際児を肯定的に受け入れる環境（社会）は、「居住地」（住み心地等）として、国際児のアイデンティティ形成の要因のひとつとしてもあげられている。また、もうひとつの前提である、二言語と二文化の知識の習得についても、それらに関与する条件（要因）がすでに明らかにされている。そこで、次に、国際児のアイデンティティ形成に影響を及ぼす要因、および日系国際児の言語・文化習得（継承）にかかわる条件（要因）について言及する。

国際児のアイデンティティ形成に影響を及ぼす要因

鈴木（2004, 2008b）は、複数の文化が混在する環境で育つ日系国際児（両親の一方が日本人、他方が外国人）の（文化的）アイデンティティ形成に影響を及ぼす主な要因として、①「居住地（国）」、②「両親の国（文化）の組み合わせ」、③「日本人の親の性別（母親と父親のどちらが日本人か）」、④「国際児の外見的特徴（体つき、顔つき、皮膚や髪の色など）」、⑤「家庭環境」、⑥「学校環境の選択」をあげている。

「居住地（国）」は、自然環境や経済・社会システム等を包括しており、国際児のあらゆる側面に大きな影響を与え、個人を作っていく土台（基礎）である（鈴木, 1997；鈴木・藤原, 1994）。特に、居住地の社会がほかの文化に開かれている程度は国際児の住み心地にも大きく関係する（鈴木, 2004）。また、「両親の国（文化）の組み合わせ」は、他者から見られる国際児のイメージ、あるいは、社会のなかでの国際児の位置付けと関与するので、同じ国に居住する国際児であっても、両親の

国（文化）の組合せによって経験が異なってくる。「日本人の親の性別」は日系国際児の国籍等の法律上の事柄にも関連し、居住地の人々と近似した「外見的特徴」をもつ国際児は周囲から目立たつことなく生活できる。「家庭環境」には、親自身の属性（教育水準、性格、言語能力、職業、宗教、両文化への理解度）、夫婦関係、きょうだいの有無、言語使用、経済状態、将来設計などが含まれる。「学校環境の選択」は、日本語補習校授業（以下、補習校）等を含む学校教育の選択を意味する。これらの要因が、子どもの発達過程のなかで、さまざまに絡み合い、国際児のアイデンティティや文化的アイデンティティ形成に関与していく。さらに、国際児の「出生地」「年齢」「性別」なども、（文化的）アイデンティティ形成に影響を及ぼす要因と考えられる（鈴木, 2005, 2008a）。

日系国際児の言語・文化の習得（継承）

日系国際児の言語・文化習得（継承）に関与する条件（要因）としては、①「居住国（地）の言語・文化」、②「親自身の志向性」、③「子どもの言語、文化、教育についての親の考え方（姿勢）」、④「家庭の経済状態（家庭環境のなかのひとつ）」、および、⑤「子どもの発達（年齢）および親子の相互作用」の5つがある（鈴木, 2007, 2008b）。

「居住国（地）の言語・文化」は、国際児の文化的アイデンティティ形成にかかわる要因としての「居住国（地）」の一部であるが、自然な状態では、居住国（地）の言語・文化は、主言語・主文化（第一言語・第一文化）として継承される可能性が高く（鈴木, 2011）、居住地以外の言語・文化を継承するためには、何らかの意図的な介入が必要にな

る(中島, 1998など)。^②「親の志向性」は、国際児の誕生以前から存在し、親自身の気持ちや考えがどちらの国(文化)に向いているかということであり、親自身(特に異文化出身の親)の母国への愛着、定住の決意、現地への愛着と居場所(感)、言語能力などと深く関係する(鈴木, 1997など)。「親の志向性」は、^③「子どもの言語・文化・教育についての親の考え方(姿勢)」に密接にかかわっていく。「子どもの言語・文化・教育についての親の考え方(姿勢)」は、一般的な発達期待に加え、子どもにどのような言語や文化(居住地出身者の言語・文化か、異文化出身者の言語・文化か、両言語・文化かなど)を習得させたいか(身につけて欲しいか)を含んでおり、家庭における言語使用や文化実践(生活の仕方、生活様式)に反映される。その際、親自身がそれぞれの言葉・文化を自分自身のなかでどう位置づけているかも、子どもへの言語・文化の継承に深くかかわる(鈴木, ibid.)。さらに、子どもの成長とともに、「学校(保育園、幼稚園などを含む)選択をどうするか」という問題も発生する。このように、^②「親の志向性」は、^③「子どもの言語・文化・教育についての考え方」と密接に関連し、家庭の言語・文化や学校選択に影響を及ぼし、言語・文化の継承に大きく関与する。居住国の言語・文化が優勢ななかで、異文化出身の親の言語・文化を継承させるためには、すでに述べたように、異文化出身の親の言語・文化への接触量を意図的に増やすための介入や方略(例:一時帰国、補習校への通学)が必要だが、それらを実行するためには、家庭の経済力(^④「家庭の経済状態」)が不可欠になる。さらに、全般的な親の考え方は子どもの言語・文化に影響を与えるが、それぞれの

子どもには、個性があり、年齢とともに成長・変化し、それは、親の考え方に影響を及ぼす。すなわち、^⑤「子どもの個性と発達および親子の相互作用」によって、言語・文化の継承(習得)が進んでいく。また、時間の経過とともに、「居住地の社会的・文化的・経済的状况」、「親自身の志向性」(例:離婚などによる変化)、「言語・文化・教育についての親の考え方」、「家庭の経済状態」(例:事業の成功・失敗)なども変化し、それらは、言語・文化を含む子どもの発達全般に影響を及ぼす。なお、鈴木(ibid.)は、これらの5つの要因を考慮したうえで、国際家族(国際結婚家族)における、子どもへの言語・文化継承のメカニズム(仮説)を提示している。

上記を総合すると、国際児の文化的アイデンティティ形成に関与する主な要因は図1のように示される。

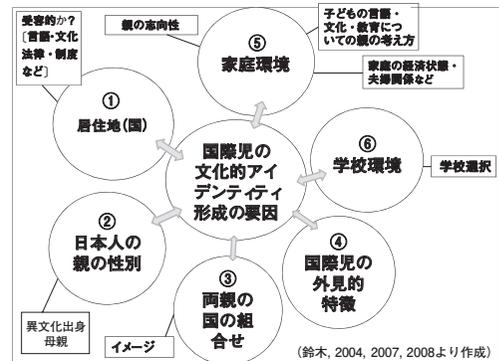


図1 国際児の文化的アイデンティティ形成の要因

本稿の目的は次の2つである。

1. 二つの言語力と二つの文化の知識の習得、および国際児を肯定的に受け入れる環境の存在を中心に、思春期の日系国際児(中学生、第1子)の文化的アイデンティティの様相について考察する。第1子に着目したのは、

出生順位がパーソナリティ形成や言語習得等に影響があることが知られているからである。なお、ひとりっ子は含めない³⁾。

2. 「国際児としてのアイデンティティ」の前提条件である、二言語と二文化の知識の習得には、「居住国（地）の言語・文化」、「親自身の志向性」、「子どもの言語、文化、教育についての親の考え方（姿勢）」、「家庭の経済状態（家庭環境のなかのひとつ）」、および「子どもの発達（年齢）および親子の相互作用」が関与するが、ここでは、「子どもの言語、文化、教育についての親の考え方（姿勢）」、すなわち、子ども（日系国際児）の文化的アイデンティティをめぐる日本人の母親の考え方を把握し、それと子どもの文化的アイデンティティとの関係について検討する。

なお、本稿における「文化」は、「発達過程のなかで、環境との相互作用によって形成されていく、ある特定集団のメンバーに共有される反応の型」（鈴木、2006、p.4）である。文化的アイデンティティについては、いろいろな考え方⁴⁾があるが、本稿では、「自分がある文化に所属しているという感覚・意識（文化的帰属感・意識）」（鈴木、2008、p.33）とし、自分の意識（認識）と自分に対する他者の認識の認知の相互作用によって形成され、一生変化していくものととらえる（鈴木、2006）。

<方法>

1) 調査参加者：現地校および補習校の両方に在籍する日系国際児中学生（現地校でも補習校でも中学1年から3年）のうち、日本人の母親とインドネシア人の父親をもつ（以下、日伊国際児）第1子（きょうだいがいる）で、面接調査への承諾を得られた5人（12歳～14歳；女子1人、男子4人）

およびその日本人の母親（30代後半から40代）である。

2) 調査期間・場所：2008年。インドネシアB州の中心部。補習校、参加者の自宅等。
3) 調査方法：個人面接（半構造化面接）および参与観察。面接所要時間は、国際児の場合は50分から70分、母親の場合は2時間から3時間である。面接調査の際には、筆記するとともに、承諾を得たうえで、ICレコーダで録音した。日伊国際児への面接では、基本的に日本語を使用した。必要に応じて一部インドネシア語（単語等）も使った。また、国際児が在籍するクラスを中心に、授業参観をおこなった。

なお、筆者は、1991年から現在に至るまで、縦断的フィールドワーク、ラポールの重視と援助、面接（半構造化・非構造化面接）と参与観察の反復、マクロ・ミクロ的視点などの特徴をもつ「文化人類学的-臨床心理学的アプローチ（CACPA）」（Suzuki, 2002；鈴木、2008bなど）による調査を継続しており、その結果の一部も使用している。

4) データの整理・分析：ICレコーダに録音した面接内容を逐語的に文字に起こし、対象者ごとに項目別に整理し、質的な分析をおこなった。

<結果と考察>

まず、居住地であるインドネシアの特徴、および、家庭内の言語使用と国際児の言語・文化習得（自己評価）を中心に、調査参加者（事例）の特徴を提示し、次に、日伊国際児の（文化的）アイデンティティ、さらに、子ども（国際児）の文化的アイデンティティについての日本人の母親の考え方を示し、若干

の考察をおこなう。

1 居住地および調査参加者の特徴

(1) 居住地の特徴

インドネシアの27州の一つがB州である。ヒンドゥ教に根差した文化・伝統を固持しているが、観光開発が進んだ地域では多様な文化が混在している。1980年代後半からさまざまな組み合わせの国際結婚が増加している。学校制度は日本と同様の6・3・3・制で、都市部では、公立、私立、国際学校（英語、仏語）、バイリンガル校（英語とインドネシア語）などが存在する。比較的経済的に豊かな州であり、教育レベルも高く、大半が高校に進学する。大学・専門学校へ進む者も多い。

外務省海外在留邦人数統計によると、調査時（2008年）のB州の在留邦人数（元日本人やインドネシア国籍のみの日系国際児を含まない）は1,853人、そのうち永住者は645人である。1990年代から、日本人とインドネシア人の国際結婚数および日系国際児数が年々増加している。日本人会は1991年頃から存在し、日本人・日系人コミュニティの中核であるが、個人会員の大部分は日本人国際結婚者とその家族である。補習校は、1990年に開校され、日本人会の全面的な支援を受けている。2008年9月現在では、合計218人の日本人・日系国際児が在籍しているが（幼稚部81人、小学部118人、中学部19人）、日系国際児の割合が大きい。補習校以外で、日系国際児が日本語を学べる場としては、2000年代初頭に設立された私設機関（2歳～成人）がある。なお、日本語（選択科目）を学べる現地校（中学校・高校）も存在する。

共通語はインドネシア語だが地域言語も存在する。2006年の新国籍法の施行で、両親の

どちらかがインドネシア人の場合には、17歳（成人）になるまで二重国籍を保有することが可能になった。かつて、日本軍によって占領された経験をもつにもかかわらず⁵⁾、日本人や日系人は受容されており、日本語を話せることも肯定的に評価されている。近年、インターネット（Wi-Fi）の普及が著しい。また多くの日本人・日系人家庭には衛星放送（NHK）がある。総合すると、日系国際児にとって住みやすい場所と言える⁶⁾。

(2) 調査参加者（事例）の特徴

1) 日系国際児と両親

日系国際児：インドネシア生まれ4人、日本生まれ1人（生後間もなくインドネシアに移動）。二重国籍4人、インドネシア国籍1人。きょうだいは、ほかに1人か2人。1人以外は核家族。ヒンドゥ教4人、イスラム教1人。全員が一時帰国を経験している（回数は多様）。

日本人の母親：30代後半から40代。インドネシア国籍4人、日本国籍1人。定住予定4人、未定1人。滞在年数は13年から16年、インドネシア語会話は中から上（自己評価：10点中4-9点）。専門学校卒か大卒で、全員職業をもつ。

インドネシア人の父親：40代、地元出身4人（ヒンドゥ教）、他島出身1人（イスラム教）。高卒から大学院修了で、自営業4人、専門職1人。日本語会話は中程度である（妻の評価によると10点中3-7点）。

周囲は日本語の学習に好意的である。また、経済状態も良好と推測される。

2) 家庭内の言語使用

表1は各事例の家庭内の言語使用を示している。母親は子どもに対して程度の差はあるが全員日本語を使用している。インドネシア

語等の言語も用いるが、事例4以外は日本語をより多く使っている。子どもから母親に対しては、事例1と事例5では日本語が優位だが、そのほかではインドネシア語が優位に使われている。父親と子ども間については、事例1と事例5では、日本語が使用されている（事例1は日本語のみ、事例5は日本語優位）が、そのほかの事例ではインドネシア語か地域言語等である。きょうだい間の会話はインドネシア語（事例3は地域言語も使用）である。

3) 子どもの言語と文化

同年齢のネイティブを10点としたときの国際児自身の言語力および文化の知識についての自己評価結果を示したものが表2である。言語習得の程度については、日本語とインドネシア語のそれぞれについて、「話す」「聞く」「読む」「書く」の4つの側面から評価してもらった。また、そのほかに可能な言語もあげ

てある。数値は、それ自体の意味よりも、個人のなかでの日本語とインドネシア語のバランス、および日本文化とインドネシア文化のバランスを把握するために有効と考えられる。

各事例の日本語（平均）とインドネシア語（平均）のバランスは、事例1が $4.5 < 8$ 、事例2が $4.5 < 9.75$ 、事例3が $7.5 < 9.75$ 、事例4が $6 < 9.75$ 、事例5が $7.75 < 10$ であり、すべての事例において、日本語よりもインドネシア語の評価が顕著に高い。また、4つの側面についても、インドネシア語はすべて8~10と高得点であるのに対して、日本語は、「話す・聴く」が「読む・書く」よりも高い傾向がある。なかでも「聴く」が高い。「読む・書く」がより低い理由は、「漢字」の習得の難しさである。

日本文化の知識とインドネシア文化の知識のバランスについては、事例1は $3 = 3$ 、事例4は $6 = 6$ 、事例5は $5 = 5$ で両文化とも

表1 家庭のなかでの言語使用（事例別）

事例	1	2	3	4	5
主言語	イ/B/日	イ>日(時々)	-	イ/日	日
母→子	日/イ	日/イ	日 90%>他	イ/日	日>イ(混)
子→母	日/イ	イ>日	イ 90%>他	イ/日	日>イ(混)
父→子	日	イ>他	B	イ	日>イ(混)
子→父	日	イ	B	イ	日>イ(混)
きょうだい	イ(90%)	イ	B, イ	イ	イ

注) イ=インドネシア語, B=地域言語, 日=日本語, 他=その他の言語, (混)=混合, ○/○=同程度だが左がやや多い

表2 日系国際児の言語力および文化知識（自己評価）

事例	1		2		3		4		5	
	日	イ	日	イ	日	イ	日	イ	日	イ
話す	5	8	4	10	7	9	6	9	8	10
聴く	5	8	6	10	9	10	7	10	9	10
読む	4	8	4	9	7	10	6	10	7	10
書く	4	8	4	10	7	10	6	10	7	10
平均	4.5 < 8		4.5 < 9.75		7.5 < 9.75		6 < 9.75		7.75 < 10	
地域言語	6		-		8		-		2	
英語	4		-		8		5.5		4	
知識：日対イ	3 = 3		5 > 3		7 < 8		6 = 6		5 = 5	

注) 日=日本語/日本文化, イ=インドネシア語/インドネシア文化

同等だったが、事例2は5 > 3で日本文化、事例3は7 < 8でインドネシア文化が優勢である。しかしながら、両文化の差は1～2点である。言語とは異なり、文化の場合には、インドネシア文化の知識についても3～8と評価が低く、また、両文化とも同等か差が少ないことは興味深い。

2. 日本・インドネシア国際児の（文化的）アイデンティティ

文化的アイデンティティに関係が深いと思われる、「日本人とインドネシア人の感じ方・考え方」、「日本人の母親とインドネシア人の父親への気持ち」、「国際児としての嫌な経験および外見の自己評価」、そして、「将来の居住地、国籍、日本語の保持」について取りあげ、インドネシア在住の日伊国際児の文化的アイデンティティを把握する。

(1) 日本人とインドネシア人の感じ方・考え方

日本人、あるいはインドネシア人の感じ

方・考え方を10とした場合、それぞれの考え方・感じ方をどの程度もっているかを自己評価してもらった結果を示したものが表3である。

3事例（事例1、2、4、両者の差は1～3点）は日本人よりもインドネシア人の感じ方・考え方がやや優位、2事例（事例3と5）は両方とも同程度と評価している。また、日本人の考え方・感じ方については個人差が大きい（4～10点）、インドネシア人の考え方・感じ方については、事例3（10点）以外は7点である。事例3が両方とも10点と評価している以外は、どちらの考え方・感じ方に対しても4～7点で評価している。

(2) 日本人の母親とインドネシア人の父親への気持ち

表4は、両親が日本人（母親）とインドネシア人（父親）であることについての国際児の気持ちとその理由を示している。

5事例すべてが、母親が日本人、父親がインドネシア人であることを肯定的にとらえているが、その理由についてはさまざまである。

表3 日本人の感じ方・考え方とインドネシア人の感じ方・考え方

事例	1	2	3	4	5
日本人vs.インドネシア人	5 < 7	4 < 7	10 = 10	6 < 7	7 = 7

表4 日本人の母親とインドネシア人の父親への気持ち

事例	母親が日本人	理由	父親がインドネシア人	理由
1	肯定	日本のことわかるし。盆踊りとか。	肯定	インドネシア人の儀式。インドネシア人のからい食べ物が好き。
2	肯定	インドネシア語と日本語がわかるから。	肯定	インドネシア人になりたい（インドネシア語の方が簡単）。
3	肯定	言葉がいっぱいわかると、日本語とか英語とか、仕事見つけるのが簡単。	肯定	地域語がわかる。
4	肯定	わかんない。	肯定	よくわかんないけどよかった。
5	肯定	よく日本に行ったり、日本でおばあちゃんとかいるから。	肯定	インドネシアに住んで友達がいっぱいできたから。

(3) 国際児であることの気持ち、いやな経験、
外見の自己評価

国際児であることに対する気持ちとその理由、国際児であるためのいやな経験や悲しい経験、そして外見の自己評価について示したものが表5である。

まず、「国際児であることの気持ち」については、全員が国際児であることを肯定的に評価しているが、その理由については多様である。「国際児であるためのいやな経験」については、3事例（事例1、2、4）が「ある」、2事例（事例3、4）が「ない」と回答している。「ある」場合の理由として、事例1と事例4は「戦争」について言及している。インドネシアの学校では、かつて、日本がインドネシアを占領したことを小学校5年生ごろに勉強する。日系国際児は学校では日本人として認識されていることが多く、その時に、否定的な経験をするところがあるが、個人差がある。「からかわれている」だけととらえる場合と、「いじめられた」と意識する場合とがある。後者の場合には、そのことがいやな思い出として記憶に残ることになる。「外

見」については、事例1と事例2は「インドネシア人」、事例3は「半分半分」、事例4と事例5はどちらかには限定していない。

(4) 将来の居住地、国籍、日本語の保持

表6は、国際児が将来の居住地や国籍についてどのように考えているか、また、日本語の保持（「日本語を忘れたら？」）についてどう思っているかを示している。

事例1、事例2、事例5は、将来の居住地はインドネシアであるが、将来の国籍については、事例5はインドネシアだが、事例1はすでにインドネシア国籍、事例2は未回答（現在の国籍をインドネシアと答えたため尋ねていない）である。事例3は、居住地については母親の意向次第だが、国籍はインドネシアで、事例4のみが将来の居住地も国籍も日本と回答している。日本語の保持については、事例2以外は、日本語を忘れてしまうことには抵抗を示しており、保持していきたいと考えている。面接当時、事例2は日本語よりも国際語である英語に興味をもっているようだった。

表5 国際児であることの気持ち、いやな経験、外見の自己評価

事例	国際児であること	理由	(国際児であるための) いやな経験や悲しい経験	外見の自己評価
1	肯定	日本とインドネシアがわかる。	ある。日本は戦争で悪い事をしたから、日本人だということで、友だち（インドネシア人）からいじめられた（5年生～）。	インドネシア人（他の人は日本人という）。
2	肯定		母親が日本人のために言われたことがある（いじめられたことはない。「ちょっとはずかしい。Strangerみたいになっちゃう。」）	インドネシア人（パパに似てるから）。
3	肯定	日本に行ける。学校を卒業したら仕事をやる。	ない。「今の学校の友達は母親が日本人のことを知らない。いいたくない。」	インドネシア人は日本人、日本人はインドネシア人に似ているという。「ほくも半ぶん半ぶん。」
4	肯定	インドネシアのことも日本のことも知っているから。	ある。「『なんで日本、昔、インドネシア、戦争したのって。日本人なのにどうしてここに住むのって。』学校でそれを先生が説明したら、ともだちがよくいじめるの。」	「わかんない。目がたぶん日本人。」
5	肯定	わかんない。	ない。	（どちらでもない）

表6 将来の居住地、国籍、日本語の保持

事例	将来の居住地	理由	将来の国籍	理由	日本語を忘れたら？
1	インドネシア。	生まれてからインドネシアにいるから。	(インドネシア国籍)		悪い。日本語を読めない。日本から来たものを読めない。
2	インドネシア。	友達がインドネシアにいるから。			忘れてしまってもいい。日本語はinternationalじゃないから。
3	お母さんが日本っていったら日本、インドネシアっていったらインドネシア。	自分で決められない。	たぶんインドネシア。	インドネシア語の方が得意だから。	いやだ。
4	日本。		たぶん、日本。	インドネシアより外国に行くの簡単だから。	いやだ。おばあちゃん(日本)と会って、日本語できなかつたらはずかしい。
5	インドネシア。	のんびりできそう。	インドネシア。	ここに住むからじゃない。	ちょっと困る。たとえば、家でだれか日本人と話すとき忘れちゃったらどう言えばいいんだろう。

3. 子ども（国際児）の文化的アイデンティティと日本人の母親の考え方

子ども(国際児)の文化的アイデンティティに対する日本人の母親の考え方を明らかにするために、子どもの言語・文化の習得、感じ方・考え方、両親の一方が日本人ということの受けとめ方、さらに国籍選択について事例ごとに、母親の語りを提示する。その際、個人が特定されないように、内容の本質を変えない範囲で修正を加えている。括弧()内は筆者による補足である。

(1) 子どもの言語・文化の習得について

【事例1】 インドネシアでどんなところでも通用するようなインドネシア語。(略) 日本語は彼次第。これからいい感じで日本語やっていって、大人になっても、そこに意義を見出せば続ければいい。親はどうにももうできないので。(略) 文化については(略) 人間としてもっているべきことで日本の方がいいと思っている部分があれば伝えていきたい。インドネシアもすばらしいところがあるので、どっちにいても、ちゃんとした人間であってくれれば

いい。インネシアを基盤に、生まれてからずっと育て、こっちの学校にもいっている子なので、インドネシアでは中途半端になってほしくない。

【事例2】 インドネシアに来ているからインドネシア。日本は、言葉とかではなく、バックにはあると思う。生活の仕方とか、ものの考え方。とくにどちらというのではなくこのままで。(略) これから、外国に留学したいって言っているし、そうしたらそっちの文化も身につけると思うし。(略) そういった意味で特に何人に育ててほしいというのはない。ただ、言葉がインドネシア語だっていうだけで。

【事例3】 インドネシアに住んでいるので、必ずインドネシアの文化はみにつける。必ずそうなる。(略) 親の思うようにならない。(略) 何も思わない方がうまくいく。(第一言語はインドネシア語、第二言語が日本語。)

【事例4】 日本語はもう少し本が、小説とかが読めるぐらいになってほしい。インドネシア語は、今までせっかくやってきたので、今のレベルはキープして、両方ですね。新聞が読めるぐらい。文化については、こっちに住んでいる限りにおいては、インドネシアの文化を尊重しなければならないの

で、理解はしてほしいですよ。ね。（略）両方の文化を知ってもらいたい。どっぷりつからなくてもいいけれど、知識として知ってもらえればいいかなど。

[事例5] やっぱりインドネシア語は完ぺきにできるようにしたいですね。（略）あくまでもインドネシア人としてこれからも育つと思うんで。

すべての事例において、日本人の母親は、子どもには、居住地の言語であるインドネシア語をきちんと身につけてほしいと考えている。特に、事例1、事例2、事例5はインドネシア語習得の重要性を強調している。また、事例1と事例5はインドネシア（言葉／人／文化）が基盤であるという明確な考えをもっている。それに対し、事例2と事例3は文化については特に希望はないが（事例3は必ずインドネシア人になると考えている）、事例4は両言語・両文化をある程度身につけてほしい。

（2）子どもの感じ方・考え方について

ーインドネシア人か日本人か

[事例1] いいところをミックスしてバランスのいい人間になって欲しいと思う。

[事例2] 基本としては、宗教があるので、インドネシア人。宗教的な面というか、Hindu教、そこはゆるがない。彼のなかでもそれはあると思う。

[事例3] たぶん彼の場合はインドネシアで育っているし、これだけ大きくなってきますから、しみついていると思うんだけど、消そうと思っても消せないインドネシア文化みたいなような...あと、しみついているインドネシアの文化にどれだけ日本の内容を、理解できるところをくつつけていくかというのは、補習校だったりするんじゃないのかなと思いますけど。

[事例4] 日本の方を多く持ってほしい。

[事例5] インドネシア的っていうか、かれらの生活

はインドネシア人ですから。

子どもにインドネシア人の感じ方・考え方をもってほしいか、それとも日本人の感じ方・考え方をもってほしいかについては、事例2、事例3、事例5はインドネシア人、事例1は「よいところをミックスしたバランスのよい人間」、事例4はより日本人であり、母親によって異なっている。

（3）両親の一方が日本人であることについての子どもの受けとめ方

[事例1] いやだとは思っていない。ちょっといいかなぐらいに思っていると思う。

[事例2] たぶんネガティブには受け止めていない。（略）うちの子たちぐらいたと、日本人でちょっと自慢。日本に行ったことがあるとか、日本語が先生よりできるとか。

[事例3] 適当に使い分けているんじゃないでしょうか。現地校の学校に行くときには、インドネシア名で呼ばれ、正しいインドネシア人のつもりで、補習校にいるときには、日本名で呼ばれて、日本人のつもり。

[事例4] 母親が日本人だということは現地校では結構有名。自慢。他の人とは違う。

[事例5] 学校なんか行くと、「Japan」とか呼ばれることがあるみたいですね。そういうような呼び方をする人もいるみたいだけれど、それを引け目とは思っていないし、特に、それでいじめられたりもないと思いますね。

両親の一方（母親）が日本人だということについて、事例1は「ちょっといいかな」、事例2は「ちょっと自慢」、事例3は「適当に使い分けている」、事例4は「自慢」、事例5は「引け目とは思っていない」と述べている。子ども（国際児）は母親が日本人であることをむしろ肯定的にとらえているという認

識が母親にあることがわかる。

(4) 国籍の選択について

事例1については、インドネシア国籍のみの保有なので、そのほかの事例について提示する。

[事例2] 本人次第。たぶんインドネシアを選ぶと思う。日本、選んじやったらここに帰ってこなくなるから大変ですよ。希望としても、かれの場合はインドネシアです。

[事例3] 本人が最終的に便利な方を選んでくれたらいいと思う。本当の気持ちです。その時にかれの状況に応じて便利な方を選んでくれたらいいのになって。

[事例4] 女子だから、結婚する相手によって国籍とか変ると思うんですけど。とりあえず、日本ですね。(略) インドネシア人だと、苦労することになるので、いちおう将来の安定した生活とか考えると、日本人と結婚してもらいたくなって。

[事例5] ゆくゆくはインドネシア国籍を選ぶことになると思います。

事例2と事例5はインドネシア、事例3は本人次第、事例4は日本で、事例によって異なる。

<総合的考察>

本稿における調査参加者(事例)の特徴を総合すると次のようになる。日系国際児(第1子)は、インドネシアで誕生したか、生後間もなくインドネシアに移動、その後もインドネシアに居住し、中学生に至っている。そのため、居住地であるインドネシアの影響力が強いと考えられる。幼稚園から現地校および補習校に通学し、日本への一時帰国経験がある(回数は多様)。両親とも配偶者の言語が可能である。

ここでは、思春期の日伊国際児の文化的アイデンティティ、さらに、国際児の文化的アイデンティティへの母親の考え方の影響について検討する。

1. 「国際児としてのアイデンティティ」の形成

(文化的)アイデンティティ形成の要因に関しては、「居住地」はインドネシアB洲(都市部)、「両親の国(文化)の組み合わせ」は日本人とインドネシア人、「日本人の親の性別」は母親(父親がインドネシア人)、「学校選択」は現地校と補習校の組合せである。経済的には比較的めぐまれていることが推察されるが、「家庭環境」や「外見的特徴」には個人差がある。

日伊国際児の(文化的)アイデンティティを総合してみると、日本人の母親とインドネシア人の父親をもっていることについては、全員が肯定的に評価していたが(表5)、日本人よりもインドネシア人の感じ方・考え方が幾分強いか両者が同程度だった(表3)。外見の認識、将来の居住地や国籍については事例によって異なっていた。なお、学校で日本との「戦争」について学習することは、個人差があっても、日伊国際児が、「日本人(日系人)」としての自分を意識(認識)する契機になることが推察される。

すでに述べたように、国際児として自然と考えられる「国際児としてのアイデンティティ」の形成には、二つの言語力と二つの文化の知識の習得、および国際児を肯定的に受け入れる環境の存在が必要である。

言語に関しては、どの国際児も日本語とインドネシア語が可能だった。母親が国際児との会話に日本語を優先的に使用し、さらに父

親も日本語を使っている事例（事例1、5）もあるが、国際児自身の自己評価によると、全事例において、日本語よりもインドネシア語が優位で、ネイティブとほぼ同等と考えられた。これは、居住地（アイデンティティ形成の要因のひとつ）の重要性を示しており、すでに指摘されているように、居住地の言語であるインドネシア語が優位に継承（習得）されている。日本やインドネシアの知識に関しては、どちらも同程度かほぼ同程度で、両者間の差は少ないが、どちらの文化の知識もネイティブと同レベルではなかった。

また、国際児をとりまく環境、すなわち、国際児の居住地では、日本人や日系人は受容されており、日本語を話せることも高く評価されていることから、国際児を肯定的に受け入れる環境が存在すると考えられる。

本稿で取り上げた事例は中学生で、発達途上にあるが、以上のことを総合すると、日イ国際児中学生は、二つの文化（国）を混合（融合）した「国際児としてのアイデンティティ」を形成していく過程にあると推察される。しかし、二文化の融合の様相や度合いについては今後さらに明確にする必要がある。

2. 子ども（国際児）の文化的アイデンティティと母親の考え方

「国際児としてのアイデンティティ」の前提条件である、二言語と二文化の知識の習得に関与する要因のひとつである「子どもの言語、文化、教育についての親の考え方（姿勢）」に着目し、母親の考え方と子ども（日系国際児）の文化的アイデンティティとの関係について明らかにする。

表7は、すでに言及した、文化的アイデンティティに関連が深いと考えられる、言語・

文化、感じ方・考え方、そして国籍選択について、子どもの状態と母親の考え方を並べて提示したものである。

まず、「言語・文化」については、事例4の母親はインドネシア語・文化と日本語・文化の両方の習得を望んでいたが、それ以外の母親は子どもにむしろインドネシア語をきちんと習得してほしいと考えていた。しかしながら、「文化」については、事例1と事例5の母親がインドネシアが基盤であるという考えをもっているのに対し、事例2や事例3の母親の考えは明確ではなかった。子どもの「言語」をみると、すべての子どものインドネシア語が日本語よりも優位だが、事例1と事例5の母親のようにインドネシアが基盤と考えていても、子どもの「文化」については両文化が同程度だった。また、事例4の国際児も両文化を同程度習得していた。事例2の国際児は日本が優位、事例3の国際児はインドネシアが優位だが、母親には希望はなかった。これらは、文化は複雑な概念があり、個人によってとらえ方が異なることによるものとも考えられる。今後、さらに検討する必要がある。

子どもの「感じ方・考え方」については、事例2、事例3、事例5の母親はインドネシア優位、事例1の母親はミックス、事例4の母親は日本優位を望んでいた。事例2のみが、母親の希望と子どもの感じ方・考え方がインドネシア優位で一致していたが、ほかの事例については一致しなかった。すでに述べたように、子どもが両文化の感じ方・考え方をみにつけている程度の差は小さかったことも考慮し、この理由についても今後明らかにしなければならないだろう。

将来の国籍については、インドネシア国籍

表7 言語・文化、感じ方、考え方、国籍選択 一子どもと母親

事例	言語・文化				感じ方・考え方		将来の国籍	
	子ども		母親		子ども	母親	子ども	母親
	言語	文化	言語	文化				
1	日<イ	日=イ	日<イ	日<イ	日<イ	ミックス	(イ)	(イ)
2	日<イ	日>イ	日<イ	不明	日<イ	日<イ	-	イ
3	日<イ	日<イ	日<イ	不明	日=イ	日<イ	イ	本人次第
4	日<イ	日=イ	日=イ	日=イ	日<イ	日>イ	日	日
5	日<イ	日=イ	日<イ	日<イ	日=イ	日<イ	イ	イ

日=日本, イ=インドネシア, (イ) =インドネシア国籍のみ

しかもっていない事例1および未回答の事例2を除くと、事例4は日本、事例5はインドネシアで、母親の考えと子どもの考えが同じだった。事例3の母親は「本人次第」と考えてるが、子どもはインドネシアだった。

総合すると、母親の考え方は、言語（インドネシア語優位）については、子どもの言語（インドネシア語優位）に反映されるようだったが、文化については明確ではなかった。また、感じ方・考え方および国籍選択に関しても、母の考え方が子どもに反映されている場合とそうでない場合とがあった。したがって、国際児の言語に関しては、母親の考え方の影響が強くみられたが、国際児の文化的アイデンティティへの影響については部分的にしか明確ではなかった。

ここでは、国際児の言語・文化、感じ方・考え方、国籍選択から、文化的アイデンティティを把握しようとしたが、今後は、文化的アイデンティティをより包括的にとらえ、母親の考え方と子どもの文化的アイデンティティの関連について検討していく必要がある。

<まとめと今後の課題>

本稿では、インドネシア在住で、日本人の母親とインドネシア人の父親をもつ、思春期の日伊国際児（第一子）5事例とその母親を

対象に半構造化面接を実施し、日系国際児の文化的アイデンティティ形成の様相および・子どもの文化的アイデンティティと母親の考え方との関係について検討した。その結果、幼少時からインドネシアに居住し、幼稚園から現地校（インドネシア語）と補習校（日本語）に通学し、日本人の母親が日本語の使用をこころがけてきた日系国際児は、インドネシア語・インドネシア文化と日本語・日本文化の両方がある程度習得していたが、言語についてはインドネシア語が明らかに優位だった。さらに、周囲の環境は日系国際児を受容していることから、日伊国際児たちは「国際児としてのアイデンティティ」を形成する途上あると考えられた。日本人の母親の考え方については、国際児の言語とは関係があったが国際児の文化的アイデンティティへの影響については部分的にしか明確でなかった。

今後、各事例についてのさらに詳細な分析をおこなうとともに、他の地域（国）に在住する日系国際児との比較検討を通じて、本研究の成果を検証しなければならぬだろう。さらに、得られた知見を国際児の（文化的）アイデンティティ形成への支援に生かしていくことも望まれる。

<注>

- 1) 一般的には、「ハーフ」あるいは「ダブル」とも呼ばれている。
- 2) あくまでも現在の社会的状況においてである。すなわち、社会や他者は国際児にバイリンガルやバイカルチュラルであることを期待するが多い。そのため、両言語・両文化を習得していることが必要だが、もし社会が単一言語・文化の国際児を自然に受容するようになればこの条件は不要になる可能性もある。しかしながら、両方の言語・文化を習得していることは、どのような状況においても国際児のアイデンティティ形成にポジティブな影響を与えると考えられる。
- 3) 調査を継続するなかで、一人っ子の国際児には、きょうだいのいる国際児とは異なる特徴があることがわかってきているが、稿を改めて言及したい。
- 4) Hall (1997)、Tajiful (1978) など。
- 5) 日本がインドネシアを占領したことについては、小学校高学年で学習する。また、毎年、7月17日の独立記念日にはテレビ等を通じてその事実が報道される。
- 6) 父系制が強いため、母親が日本人でも、父親がインドネシア人の場合には、インドネシア人として認知され、受容される。

<引用文献>

- Hall, S. (1990). *Cultural identity and diaspora*. In K. Woodward (Ed.), *identity and difference*. London: Sage. (ホール・スチュアート (小笠原博毅訳) (1998). 文化的アイデンティティとディアスポラ 現代思想, 26(4), 青土社, 90-107.)
- マーフィ重松, S./桜井純子訳 (2002). アメラジアンの子どもたち: 知られざるマイノリティの問題 (集英社新書) 集英社
- 中島和子 (1998). バイリンガル教育の方法: 地球時代の日本人育成を目指して アルク
- 鈴木一代 (1996). 日本-インドネシア国際児の言語習得と言語・文化的環境についての一考察 東和大学紀要, 22, 127-139.
- 鈴木一代 (1997). 日系インドネシア人の文化・言語習得: 居住地決定との関連性について 東和大学

紀要, 23, 115-130.

- 鈴木一代 (2001). 日本-インドネシア国際児の言語・文化習得についての一考察 埼玉学園大学紀要 (人間学部篇), 1, 1-11.
- Suzuki, K. (2002). A study using "Cultural Anthropological-Clinical Psychological approach": Cultural identity formation in Japanese-Indonesian children. *Bulletin of Saitama Gakuen University (Faculty of Humanities)*, vol. 2, 1-9.
- 鈴木一代 (2004). 国際児の文化的アイデンティティ形成: インドネシアの日系国際児の事例を中心に 異文化教育, 19, 42-53.
- 鈴木一代 (2005). 日系国際児の文化的アイデンティティ形成: 事例の検討 埼玉学園大学紀要 (人間学部篇), 5, 85-98.
- 鈴木一代 (2006). 文化移動と文化的アイデンティティ: 異文化間結婚の場合 埼玉学園大学紀要 (人間学部篇), 6, 83-96.
- 鈴木一代 (2007). 国際家族における言語・文化の継承: その要因とメカニズム 異文化間教育, 26, 14-26.
- 鈴木一代 (2008a). 複数文化環境と文化・言語の継承: 日系国際児の親の視点から 埼玉学園大学紀要 (人間学部篇), 8, 75-89.
- 鈴木一代 (2008b). 海外フィールドワークによる日系国際児の文化的アイデンティティ形成 プレーン出版
- 鈴木一代 (2011). 日系国際児の文化間移動と言語・文化・文化的アイデンティティ 埼玉学園大学紀要 (人間学部篇), 11, 75-88.
- 鈴木一代・藤原喜悦 (1994). 国際家族の子どもの教育についての考え方 東和大学紀要, 20, 183-194.
- Tajeful, H. (1978). *The social psychology of minorities*. New York: Minority Rights Group.

<付記>

本研究は科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 「日系国際児のアイデンティティ形成とその支援のあり方に関する実証的研究」 (研究代表者: 鈴木一代) による研究成果の一部である。